

黄熟香<sup>おうじゅくこう</sup> これを蘭奢待<sup>らんじやたい</sup>と呼ぶ。

全長約一五八センチメートル

末端の分岐した部分が約一一センチメートル

切り刻んだ内側の空洞部分が約九三センチメートル

総重量は約一一・三キログラム

一説には、蘭奢待の全長は約一五八センチメートルで、本体部分が約一二一センチメートル、末端部分が約四九センチメートル。本体の大部分が空洞である。

古い書物によると、はじめ黄熟香と呼んだが、聖武上皇が改めてこれを蘭奢待と名付けたとのことである。

幣帛が付属する。

大紅沈<sup>だいこうじん</sup>

全長約一〇五センチメートル

切り取られて短くなった部分が約七三センチメートル

細い方の切り口が直径約二七センチメートル

太い部分の直径が約三二センチメートル

小さな切れ端が三つあり、そのうちの一つは樹脂が沈着していない。

総重量は、切れ端を合わせて約一七キログラム

古い書物によると、紅沈の下に鉢が置いてある。紅沈に含まれる油分が滴り落ちて鉢の中に溜まっているとのことである。

東大寺の記録に次のようにある。寛正六年（一四六五）九月二四日に三倉<sup>みつぐら</sup>（現在の正倉院）が開けられ、蘭奢待が切り取られた。これは足利義政によるものである。天正二年（一五七四）三月二八日にも再び開けられた。これは織田信長によるものである。この時の開封のための勅使（天皇の使者）は日野資定・飛鳥井雅教の二名の公卿である。旧式にのっとり、約五センチメートルを切り取った。これを三片に切り分け、一片は自身のものとし、残り二片は諸大名や近習・外様の家臣などに分け与えた。

謹んで言上する内容の覚え書き

一、奈良の東大寺は聖武天皇によって建立された。寺のなかの正藏院と呼ばれる倉（現在の正倉院）に、蘭奢待と紅沈（紅塵とも、全浅香の雅号）の二種の名香がある。この倉は勅封（天皇によって封じられる）であるので、寺が勝手に開くことはできない。それについて、先例も、足利の代々の将軍が天皇への奏上を経て、勅使の方向を得て倉を開き、これらの名香を手に入れようとしたとのが、古い書物におよそ記されている。

一、織田信長がこの名香を手に入れようと天皇に奏上したところ、勅使として日野輝資・飛鳥井雅教が出向き、天正二年（一五七四）三月二八日に倉が開けられた。この時の切り取りの奉行（政務担当者）は、佐久間信盛・菅屋長頼・塙（原田）直政・武井夕庵・松井友閑・中坊盛祐である。旧式にのっとり、約五センチメートルを切り取ったとのが、古い書物に記されている。

一、徳川家康の時代、慶長七年（一六〇二）六月一日、勅使として烏丸光広が出向き、倉を開いて修理をおこなった。この奉行は本多正純と大久保長安、東大寺の長老は学光であった。その際、家康が名香の入手を望んだとのが、古い書物におおよそ記されている。この時、倉の前に勅使の宿所を建てる差配役、ならびに勅使の世話役に、中坊秀祐が任命された。

右の通りである。蘭奢待と紅沈の二種の名香を将軍に差し上げたいと我々みな願っている。このことを早く申し上げたく思っていたが、将軍に対し恐れ多いことなので今まで差し控えていた。この倉はもう長い間開かれていないので、雨漏りやほこりなどによる汚損がないか不安を抱いている。名香を取り出すついでに、倉の内部の掃除などもおこないたいと考えている。詳しくは口頭で述べる。以上。

寛文三年（一六六三）四月一六日

東大寺の僧侶一同

井上正利殿

加賀爪直澄殿

このように東大寺の僧侶一同が願い出たところ、同年八月一九日に願いが叶い、倉の開封（修理）が命じられた。